本だな

# 「人と技術で語る天気予報史 ―数値予報を開いた 〈金色の鍵〉」

古川武彦　著

東京大学出版会，2012年1月
299頁，3400円（本体価格）
ISBN 978-4-13-063709-1

本書のタイトルは天気予報史であるが，副題にもあるように，中心は今から約50年前の数値予報の誕生の物語である．数値予報は，現在の天気予報技術の中核をなすものであるが，一般には天気予報ほどよく知られてはいない．その点，本書はいささか専門書の趣があるが，数値予報の誕生のドラマは，気象界の「プロジェクトX」ともいうべき画期的なドラマであり，数値予報のことをよく知らない読者でも興味を持って読んでいただけるのではないかと思う．本書の「はじめに」で，著者は「本書は，決して天気予報や数値予報の歴史を包括的に取り上げたものではなく，むしろ，明治に遡る気象人や数値予報の開発に接点を持った限られた人物やトピックスを対象に，論文や回顧録，残されている手紙，関係者へのインタビュー，筆者の見聞と体験を手掛かりに描いた人間中心のドラマである．」と述べている．

本書の目次は以下のとおりである．

第1章　天気予報の黎明
第2章　岡田武松のロマン
第3章　太平洋戦争の渦
第4章　「正野スクール」
第5章　数値予報の源流
第6章　プリンストン・グループ
第7章　日本初の大型電子計算機
第8章　第1回数値予報国際シンポジューム
第9章　天気野郎の頭脳流出
第10章　21世紀の天気予報

第1章～第3章では，日本の天気予報の黎明期における，気象学会の創立，疎らな観測網と少ない学理のなかで天気予報に挑戦してきた明治の先達，日露戦争，昭和初期のジェット気流の発見，太平洋戦争前後における気象人の苦悩など，数値予報誕生の前史と時代背景が描かれている．

続く，第4章～第8章では，本書の主題である日本の数値予報の黎明および大型電子計算機の導入の様子が，世界の動向（5章と6章）も視野に入れながら描かれている．第4章に述べられている「正野スクール」は，終戦の1年前の1944年10月に，中央気象台から東大の地球物理学教室に，当時34歳の正野重方が助教授として出向してきたところから始まった．「正野スクール」のメンバー（正野研究室の門下生）は，1953年に発足し1959年の数値予報の実現に大きな役割を果たしたNPグループの中心メンバーとなった．一方，アメリカでは，1950年に「プリンストン・グループ」による世界最初の数値予報実験が行われた(第6章)．プリンストン・グループの気象チームのリーダーはチャーニーで，1948年にフォン・ノイマンの招きによりプリンストン・グループのメンバーとなった．ちなみに，この時，チャーニーは31歳，フォン・ノイマンは45歳であった．第7章は，1953年のNPグループの発足から，我が国で最初の数値予報の誕生までのドラマで，本書の中心部分である．第8章に述べられているように，日本の数値予報の誕生の翌年1960年に東京で数値予報国際シンポジュームが開かれた．この会議は，日本のみならず世界の数値予報時代の幕開けを告げる画期的な会議であった．

第9章では，若き日に数値予報の開発などに係わり，その後米国への頭脳流出組となった人々の軌跡をたどっている．そして，最後の第10章では，数値予報の現在の到達点を基盤とする今日の天気予報について簡単に触れている．

本書の「おわりに」で，著者は「はるか1世紀を超える時空の気象学や気象事業の足跡を辿るうち，先達が与えられた資源と時間の制約のもとで未知の課題や任務に立ち向かう使命感とその息吹をいまさらながらに肌で感じた．」「本書が，いまなお多くの謎を秘めた気象の扉に立ち向かおうとする21世紀を担う天気野郎たちにとって，温故知新のよすがとなれば幸いである」と述べている．これらの記述から，著者が念頭に置いている第一の読者は，若い気象研究者，気象技術者であるように思われる．しかし，数値予報の誕生のドラマを，気象界の「プロジェクトX」ととらえるなら，気象界だけではなく，もっと幅広く様々な分野で未知の課題や任務に立ち向かう人たちにも時代を超えて元気を与えてくれる書物と言えるのではないだろうか．

（海洋研究開発機構　杉　正人）

© 2012　日本気象学会